

女性に望まれること



久次米 哲子

夏期休暇に入ると、日常の雑務から解放されて、静かに自分の生活が出来、すぐ側の書棚も落付いた心持で眺められるのである。その中に濃緑で黒の背に *Roses Foundations of Nutrition* という本がある。これはローズ教授がなくなられてから、教室の先生方が改訂版として、第四版を出されたものである。一九四三年であるから、今から二十年も前のことであり、私がこの本を学校においていたために、今年の一月の火災には水をかぶってしまつて、決して立派に見える本ではなくなつた。しかし私にとって、これほど生活に近い価値ある栄養学書はないのである。しかし、私は今この書物の内容を紹介しよう

するのではない。

ローズ博士夫人はコロンビア大学で栄養学の主任教授をしておられたので、私の恩師であり、また私は三年間親切な、行届いたアドバイザーとして導かれた。教授はシュワルツ女史として、沢山の研究業績を積まれたのち、医学者ローズ博士と結婚された。教授が晩婚であつたため、四十才をかなり過ぎてから、一人の男児が与えられた。しかし、折角の男児リチャード君は、生来病弱であつたために、教授はその成育に非常に心をを用いたのである。彼は、丁度、同志社幼稚園の大きい遊戯室位の広さのガラス張りの明るい円型に近い遊戯室を独占して、幼児時代をすごし

た。所が彼が漸く学令期に達した頃、普通のガラスは太陽光線の紫外線を通さないことが報告された。これはビタミンDに大いに関係があるので、教授は直ちに、その遊戯室の前に芝生を作られ、これをリチャード君の遊び場に代えられた。とにかく当時の医学者などが最もよいと考えるすべてをつくして育てられたということである。私が留学した頃、彼はすでに中学生になり、ある日教授の部屋に遊びに来られたので、私は一緒にお食事を頂いたことがあつた。食後に、彼は数種類の錠剤をポケットから出して、服用された。それで私は彼に、それらが何であるかをたづねると「僕はこれなしでは生きて行かないのです」との返事であつた。それは恐らくビタミン剤や、いわゆる栄養剤であつたと思うが、そのとき、私はリチャード君の生来の病弱さを忘れて、むしろ教授の知識の犠牲者ではないかしらと気の毒に思つた。向うみずの元気さのみなきつているべき年頃の少年が、限られた人間の知識によつて作られた薬品の数々によつてのみ、その生命の存続を託るように教育していられるのか、と考えさせられた。彼は若さの輝きさえべールに包まれた

ような上品な少年紳士であった。私は帰国して後も、ときどき、彼を思出してはいたが、誰からも彼のことは知らせて来なかった。二十年后に再び私に渡米の機会が恵まれたとき、ニューヨークにつくとすぐ私はその後のリチャード君の様子をきいたのである。教授はもう数年前、またローズ博士もその後を追うようにして世を去っていた。しかし、リチャード君は、ボストンの郊外に農園をもち、健康も一応安定して、平和な家庭に二人の子供が恵まれていられるとのことであった。そのうれしいニュースを、私に話して下さった方は「リチャード君はとうとう大学には行かれました、専門学校だけでしたよ。」と付け加えられた。しかし、私にはそんなことは全くの問題ではなかった。私は到底育ちそうもないリチャード君を、一人前としてこの世に残して行かれた教授に心からの万才を叫んだのである。教授は御結婚なさる前は、純粋な科学者としての業績を残していられたが、ローズ夫人となられてからも、カルシウムの利用を初めとして、一般の無機質が人体の栄養にどの位の役割をもっているか、また蛋白質についての消化実験などの報告の数々を発表され

たのである。また一般の栄養教育について非常に力を尽された、家庭をもつ女性をはじめとして、家族の食餌について、最も理解しやすい教授の着想による、シェアーの提案もなされた。この教授の発案は、今はほとんど全米にわたって説明され、理解されていることは、栄養学の普及にとって大きな貢献であったことと思う。

一九四一年、教授が召されてのちの栄養などの進歩は驚くほどである。私の留学時代は漸くビタミン類が考えられ初めた頃で、当時の研究方法は専ら白鼠や、モルモットを用いる飼養実験で、その体重増加即ち成長速度について各種ビタミンの効力の判断をしただけであった。しかし、科学の進歩につれて、その測定はより短時間で出来る化学的方法や機械の助けによる測定などで長足の進歩をみせ、遂にそれらをも合成しうる域にまで達して来た。これはビタミン許りの問題ではなく、複雑な組成をなしている蛋白質についていえることである。血液、筋肉、卵、種子などに含まれている蛋白質は全く同じでないことは分っているが、分離精製するのが非常に困難なために、研究は仲々進まなかった。

しかし近年になって、それを構成するアミノ酸の分析法として、ペーパークロマトグラフ法、微生物定量法、電気泳動法、総アミノ酸滴定法、アミノ酸銅塩による定量法、個々のアミノ酸の比色法などが考えられた。ところがごく最近はいオン交換樹脂を用いて、自動的に分けることができるアミノ酸分析計が開発されて、再現性のある正確な分析が僅か十七時間二十分で記録されるまでに進歩している。この目まぐるしいまでの研究発表は決して偶然には起らない。そこには深い科学的知識と周到な判断が基礎をなしているのである。恐らく女性としては一部の人を除いては、これらの結果が示されたとき、これを理解し、日常生活に近づけて行くのが使命ではないかと思う。

かつてアメリカの婦人雑誌に「主婦になるのに大学教育は無駄であろうか」という記事が出たことがある。それは大学で習得した折角の技術や才能を家庭の屑かごの中にすてている若い婦人が多くあり、色々な分野の学究婦人たちは郊外や地方の小都市に落ちついてしましい。自分の技能をさびさせ、頭脳を低下させ、知識を朽ち終らせているということか

らこの問題が起つたのである。ここで筆者は一家の主婦であることは決して尊くも、また収入の多い職業でもないことと、教育とは市場に出さなければ無価値なものであるかという二点をあげている。

私は栄養について主婦は大いにその知識が必要であると思うが、家族の生活は決してそれだけではない。現在大いに活用されている男性のワイシャツや女性のワンピースなどが洗つてすぐ着られるということは、十年ほど前には主婦達の一つの夢であつた。暑い夏に毎日アイロンをかけなければならないことは主婦にとつて大きな仕事であつた。また暑さに弱い人にもルームクーラーは勿論、扇風機さえも考えられなかつた。またカーテンの一つが、またテーブル・クロスや食器の変化が、暑さにせめられている家族の者へのやさしいなぐさめであり、楽しい力づけであることも考えたいものである。そうした快適な生活をもつためには、全く科学の進歩に多分の恩恵をうけてはいるが、これらを家庭に取入れようとする主婦が、ただ商社の広告宣伝にまよわされず、よく検討し、最も良識的なものを自分達の家庭にとり入れる能力が必要で

あると思う。

私は、近頃、ローズ教授がただ一人の令息を、充分な財源と能力はありながら、当然と思われる大学への進学さえ断念して専門学校へ、そして体に無理のないように彼の趣味を生かして園芸の方へと導かれた真の母親の姿に敬服するのである。また教授は本当に立派なローズ博士の協力者であつたと聞いてゐる。夫人即ち教授が忽然と世を去られたとき、博士は全くなすすべを知らず、教授が読書なさつていられた机も椅子も、博士の最後の日まで動かさずにそのままであつたときいている。私は教授こそは、本当に教養の身についた女性だと思つてゐる。勿論このような立派な女性は日本人の中にも沢山おられると思うが、私の今までの生活で一番近く、教えられることが多かつたので教授を女性の一人としてあげたのである。

勿論、能力とエネルギーを十分与えられ、純粹に仕事に没頭し、それによつてよろこびと希望に輝く女性があるならば、男性と同じように科学の実験をしてもよい。本を書いてもちよい、また工場を経営しても結構である。しかし、一般の主婦がそのような女性に対し

て劣等感をもつことは絶対にその必要がない。大学教育殊にわが同志社女子大学でリベラル・アーツの教育をうけている一人一人は、社会に出るための仕事ばかりを教えられたのでは、決してない。私共のうけたものは頭の中の光であり、キリストにつながる精神的なよろこびである。家庭の主婦となつたものは、自分を失なつてしまふのではなく、家庭生活にとけこんでしまわなければならない。これによつて心の落着きと安心が生れ、喜びを内に秘めて、自分の心に空想と満足感を抱いていけるのである。これから生れる高潔さと、内面的な豊かさは、夫としての男性そして育ち行く子供達の中に大切なものを見出して、尊敬し皆を幸福にして各自が意識しなかつた点までも引出して力づけることが出来るのである。そしてこの力は小さい家庭のみに止まらず、周囲の社会で順当に進み得ない家庭を、またひねくれて行く児童達の母として奉仕して行かねばならない。それらが、大学教育殊にリベラル・アーツとしての教育の恩恵をうけた女性に望まれることであると思ふのである。

(女子大教授・栄養学)